



世界遺産特集

真言密教の聖地 高野山



こうやさん

霊場「高野山」

高野山は紀伊山地北部の海拔約800mの山上に位置し、八つの峰々に囲まれた東西6km・南北3kmの盆地で、日本を代表する山岳霊場です。空海(774~835)が816年に金剛峯寺を創建して以来、真言密教の根本霊場として全国的な信仰を集めてきました。山上には、現在でも金剛峯寺と117ヶ寺が密集し、1200年もの歴史を秘めた山岳宗教都市としての文化的景観を作り出しています。また、国宝



金剛峯寺根本大塔

や重要文化財の建物以外にも多数の貴重な絵画や彫刻などが残され、山の正倉院とも言われています。山麓の紀ノ川南岸にある慈尊院と丹生官省符神社は金剛峯寺の建設と運営のために置かれた政所として空海が建てたもので、寺院と神社が並ぶ、古い信仰の形を残しています。ここから高野山壇上伽藍



高野山奥院

へは、途中の丹生都比売神社を経て、約20kmの高野山町石道が続いています。

それらの寺社の境内及び周囲には、真言密教、神道、神仏習合、修験道に関連する建物、遺跡、文化的景観が良好な状態で残され、地主神に対する祭祀をはじめ、空海以来の真言密教の伝統を保つ会式や、人々が幅広く参加するようになった行事などが年間を通して行われる場となって、海外や県内外から数多くの参詣者が訪れています。



金剛峯寺不動堂

金剛峯寺は、真言密教及び弘法大師信仰の根本霊場として広く知られており、全国におよそ4000ヶ寺ある日本の真言宗寺院の中心として、宗教的伝統を保持してきました。山上の主要な地域「伽藍地区」・「奥院地区」・「大門地区」・「金剛三昧院地区」・「徳川家霊台地区」・「本山地区」が、史跡「金剛峯寺境内」を構成しています。

伽藍地区は、「壇上伽藍」と呼ばれ、創建以来、高野山の中心的な堂塔が建立されてきた地区で、鎮守の丹生・高野明神をまつる山王院本殿や、14世紀に建てられた祈願所である不動堂のほか、近代に再建された根本大塔や金堂、空海の肖像画を安置する御影堂などが建ち並んでいます。

壇上伽藍は、弘法大師が高野山の開創にあたってまず最初に開かれた場所で、唐から伝えた真言密教の教義を建造物や諸堂に安置される本尊の仏像によって目に見える形で表現した世界で最初の密教大伽藍です。密教の主尊で宇宙の絶対的根源仏とされる大日如来と人類が対話するための聖地で、山内の重要な儀式法会のほとんどはこの壇上伽藍で営まれています。

奥院地区は伽藍地区から東へ約4kmに位置し、空海の「御廟」を中心に、弘法大師を慕う各時代の人々の墓石大小約30万基が、樹齢約500年の巨木に囲まれてたたずみ、特に深遠な文化的景観を形成しています。壇上伽藍とともに高野山の二大聖域です。また、金剛峯寺奥院経蔵や上杉謙信霊屋など、有力な武家の造った価値の高い建造物が有ります。承和2年（835）に入定した空海の廟を中心に開けた霊域で弘法大師信仰の聖地です。延喜21年（921）空海に対して醍醐天皇が「弘法



金剛峯寺大門

大師」の諡号（おくり名）を送られ、その報告のため、大師廟に入った金剛峯寺座主の観賢僧正が生けるがごとく端座した空海の姿を見て驚いたという話が伝わっています。以来、大師信仰はますます盛んになったと言われています。

大門地区は、伽藍地区の西0.6kmに位置し、金剛峯寺の正門である大門がある地域で、江戸時代に再建された金剛峯寺大門は高さが25.1mあり、

日本国内で最大級の木造二重門です。

金剛三昧院地区は、鎌倉時代に北条政子が源頼朝と実朝をとむらう山上祈願所として建立した金剛三昧院を中心とします。高野山上最古の多宝塔をはじめ、経蔵、四所明神社本殿、客殿及び台所といった主要な建物が周囲の森林と共に良好な状態でのこされています。

徳川家霊台地区

は伽藍地区の北北東0.5kmに位置し、徳川家康と秀忠の霊屋二棟を中心とし、位牌堂の遺跡を含んでいます。塀で区切られた霊屋は、技術の粋を結集して細部にまで緻密な装飾が施されており、近世初期の霊廟建築の代表例として貴重です。

本山地区

は伽藍地区の東北東に隣接し、近世初期に建てられた興山寺と青巖寺の旧敷地に当たり、現在は高野山真言宗の総本山である金剛峯寺本坊が置かれ、教団組織の中心地となっています。北側の丘には空海から金剛峯寺の創建整備を引き継いだ真然大徳の御廟が築かれています。

高野山町石道

は金剛峯寺への参詣に最もよく使われた主要道で、一町（約109m）ごとに金剛峯寺の中心である壇上伽藍からの距離を刻んだ町石（石製道標）が建てられています。距離は、

山麓の慈尊院から壇上伽藍までが約20km、壇上伽藍から奥院の弘法大師御廟までが約4km、合計約24kmです。一里（約4km）ごとに町石と同形の里石も5基建てられています。

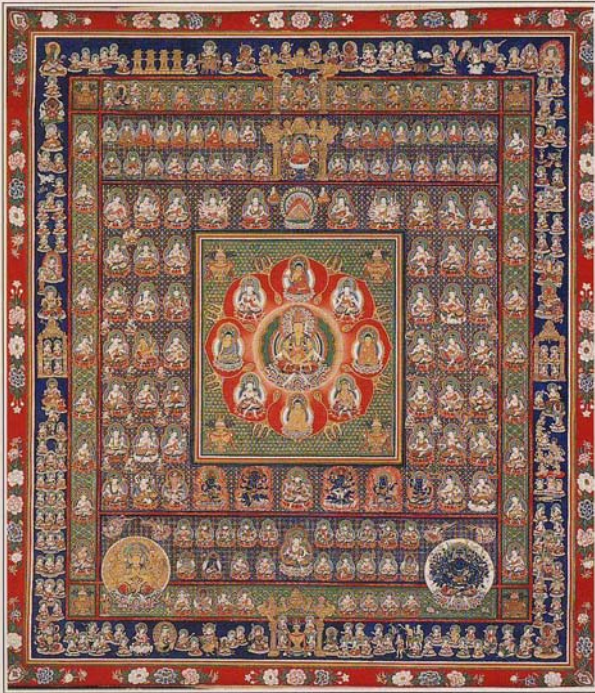
町石は花崗岩の四角柱の先端に五輪塔形を彫出した形で、全高約3.5m、重量は750kgもあります。基礎部を地中へ埋め込み、地上部分の高さは2m前後です。側面には、壇上伽藍からの距離（町数）のほか、密教諸尊の梵字の名前、建立の年月日及び目的などが彫り込まれています。諸尊の梵字は、大塔から自尊院までの町石180本と里石5本に胎蔵界曼荼羅諸尊の種子（梵字）、大塔から奥院までの町石36本には金剛界曼荼羅諸尊の種子がそれぞれ配されています。これは、高野山は大日如来の浄土（密厳浄土）であり、各町石一本一本が密教曼荼羅の諸尊であることを表すもので、各町石を拝みながらたどり着く世界が、密教の浄土・高野山であることを参詣者に意識させるものです。もともとは木製であったといわれ、鎌倉時代に高野山の僧・覚敷が石造による再興を願い、皇室や鎌倉幕府の要人、庶民の寄進をつのり、文永2年（1265）から弘安8年（1285）にかけて20年の歳月をかけて建立されました。町石と里石の合計221基のうち鎌倉時代のものが約8割残り、一町ごとに礼拝を重ねながら山上を目指した参詣の様子を今に伝えています。なお、一部の町石の基礎部には国家を守護するお経である『金光明最勝王経』を川原石に墨書した経石が埋められていました。当時の日本は、中国を支配していた「元」の二度の襲来を受け（元寇の役1274年・1281年）、国家存亡の危機にさらされていたため、外敵の排除を願う切実な気持ちが込められたものと考えられます。町石の寄進者に北条時宗などの幕府関係者が多いこともそれを裏付けているようです。町石建立には国際情勢を反映した歴史的背景があると言えます。



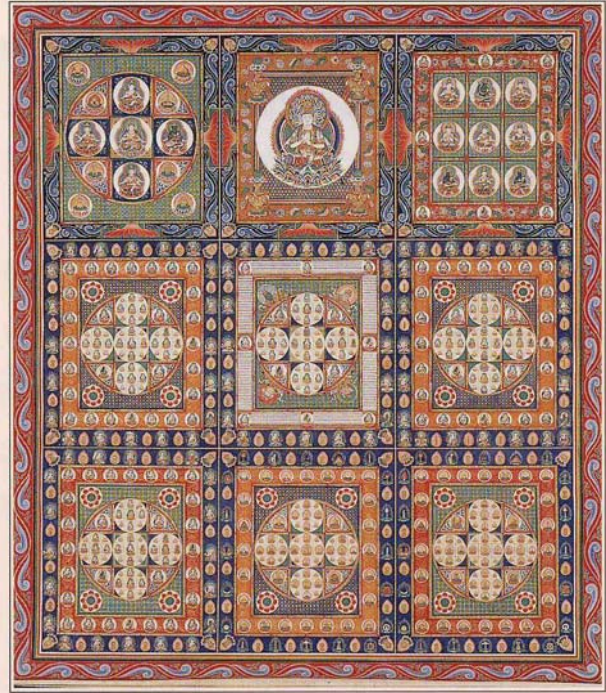
金剛三昧院多宝塔



高野山町石道



胎蔵界曼荼羅



金剛界曼荼羅

真言密教

「真言密教」とは、インドで生まれた密教原理を空海が唐の青龍寺の恵果阿闍梨から受法し、膨大な典籍や法具、曼荼羅などとともに日本に持ち帰り、完成させた教義で、宇宙の根源仏である「法身仏」の「大日如来」から直接、秘密の法を学ぶものだとされています。

密教のすべてを体系的な画像として表現したものが空海が唐からもたらした二枚の大曼荼羅です。『大日経』をもとに描かれた「胎蔵界曼荼羅」と『金剛頂経』をもとに描かれた「金剛界曼荼羅」で、密教教主である大日如来を中心とする世界が表現されています。胎蔵界曼荼羅は宇宙を大日如来の慈悲の展開として表し、金剛界曼荼羅は宇宙を大日如来の智慧の展開として表したものとされています。

(長保寺蔵 写真提供：和歌山県立博物館)

真然大徳

真然大徳は延暦23年(804)讃岐国(現在の香川県)多度津の佐伯氏の家生まれ、空海の甥だといわれています。空海の門弟となり、空海の御入定後は、その意志を引き継ぎ50数年の歳月にわたって弥勒堂・真言堂・鐘楼などの諸堂の建築にあたり、空海の悲願であった根本大塔や西塔を完成させました。さらに、真言宗学徒養成のための制度を確立し、高野山の法流「中院流」の基礎を作りました。このように真然大徳は高野山の伽藍整備と教団の建設に努め、その後の繁栄の基礎を築きました。昭和63年には真然堂の建て替え工事にもなう発掘調査で、真然大徳のお骨が納められたと考えられる緑釉陶器の御舍利容器が発見され、新たに真然廟として手厚く祀られています。